

【特別寄稿】

小牧近江の2冊のフランス語詩集

Two Poetry Books in French by Ohmi KOMAKI

柏倉康夫

KASHIWAKURA, Yasuo

キーワード: Ohmi Komaki, Paris, Vietnam, Two French poems

Received: 2021. 2. 28

1. 詩画集《Quelques poèmes》

1.1. 蘆原英了の思い出

音楽評論家の蘆原英了(1907-1981)に次のような文章がある。

私の母の弟の藤田嗣治がパリへたったまま、世界大戦になって音沙汰が知れなくなってしまった。1919年、ベルサイユ条約が結ばれてから、少しずつ叔父の様子が知れてきた。それから間もなくの頃、私たち兄弟のところへ叔父から小さな品物が送られてきた。兄のところへは叔父が挿画を描いた薄い詩集が届いた。日本の局紙を4、5枚、葦のような草で綴じた、ほんとに10頁くらいのものだったが、その1枚1枚に叔父の、それこそ細い細い線で、女の顔や雪景色などが描かれていた。それははじめて見る叔父のパリへ行ってからの絵で、きわめて新鮮なおどろきを与えられた。これが後のフジタの独特の線画になるわけだが、墨一色で、なんともいえぬ美しさであった。

その詩集の著者が小牧近江さんで、俳句のような短い詩が1頁に2、3行ずつあった。この詩集はたしか30部ぐらいの限定版であったと思う。(中略)この詩集はわが家では戦災で焼けてしまった。...小牧さん自身、もうこの詩集を持っておられないとのことであるから、この詩集の稀覯価値はたいへんなものであると思う。

これは小牧近江の『イソップ三代目』(第三文明社、1973年)の「あとがき」に載ったものである。小牧近江(1894-1978)は本名を近江谷駒(おうみや・こまき)といい、プロレタリア運動の魁となった雑誌『種蒔く人』の創刊者として知られる。

1.2. パリの小牧

近江谷は1910年(明治43年)夏、16歳のときに暁星中学を中退して、ブリュッセルで開かれる第1回万国議員会議に出席する代議士の父栄次に連れられてフランスに渡り、アンリ4世校の寄宿生となった。だが帰国した父は事業に失敗して仕送りが途絶えたため、昼間は現地の商社や在仏日本大使館で働きながら無料の夜間労働学校に通い勉学を続けた。

1914年8月3日に第一次大戦が勃発し、ドイツ軍は国境をこえてフランスに侵攻した。日

本大使館は在留邦人を集めて戦況報告会を開き、会合には100人ほどが集まった。そこには商社の関係者にまじって、滞仏中の作家島崎藤村や画家藤田嗣治などの顔もあった。大使館としては非常時に在留邦人がパリから退去することを望み、帰国する者には400フラン、他の地へ移住するなら200フランを貸し付けると伝えた。これにより多くの邦人が帰国するかロンドンなどへ避難したが、藤田嗣治はパリに残る決断をした。そして集会の帰りがけに、それまで描きためた大切なスケッチブックを近江谷に預けたという。当時大使館で働いていた近江谷に託した方が少しは安全と考えたのであろう。このとき藤田は27歳、近江谷20歳だった。

二人は大戦中もパリに残り、1919年1月から「パリ講和会議」が開かれると、近江谷は日本代表団の現地雇員として採用されて、松岡洋右のもとで新聞係として働いた¹⁾。そして会議が6月に終わると、近江谷は帰国を考えるようになった。このとき藤田から二人の交友の記念に詩画集をつくろうという提案があった。近江谷の詩に藤田が絵を添えるというのである。

出版はフランソワ・ベルヌアール (François Bernouard) が興した「ラ・ベル・エディション (La Belle Edition)」が引き受けてくれることになった。ベルヌアールは生涯に400冊を超える本やプラケット (小冊子) を出版したが、デュヒィ、ドラン、ローランサン、マチスなどが挿画を描いたものもあり、この名門出版社から無名に近い日本人の本が出版されたのは驚きだった。藤田はこの年秋の「サロン・ドトンヌ」に6点の絵が入選してパリ画壇にデビューしたから、目利きのベルヌアールが先行投資の意味で企画したのかも知れない。

こうした経緯で、近江谷の詩に藤田の絵が添えられた詩画集《Quelques poèmes (いくつかの詩)》が世に出ることとなった。発行は1919年11月である。

表紙には、Quelque poèmes / par Monsieur / Komaki Ohmia / décorés par Monsieur / Foujita./ se trouve / A LA BELLE Edition / 71, Rue des Saints-Peres, 71 / A PARIS とある。A5版 (21.0×14.0cm)、表紙を含めて20ページ。ヤシ科の植物の繊維で中綴じした冊子には、各ページに近江谷のフランス語の詩と藤田の線画が、12ページにわたって1点ずつ印刷されている。

表紙に décorés とあるとおり、藤田の線画は詩の内容とは直接関係なく、本を飾るイメージの役割をはたしている。絵は一筆がきのような繊細な線で、女性の横顔、子どもを抱く母親、傘をもって綱渡りをする女、牡丹、鴨、馬、牛などを描き、漢字で「嗣治」の署名している。

近江谷の詩はどれも数行の短いもので、上の画像の詩は、en baisant / mes yeux mouillés / vous avez bu / tous mon sang / vous oublierez / est-ce possible? (涙で濡れた私の脛に / ぐちづけ

en baisant
mes yeux mouillés
vous avez bu
tout mon sang
vous oublierez
est-ce possible?



しながら / 貴女は私の血をすべて / 飲みほした / 貴女はそれを忘れてしまう / そんなことはありうるだろうか?) というものである。句読点を省いた詩が、ガラモン体を模した美しい活字で印刷されている。

近江谷駒はこの詩画集を土産に1919年12月帰国の途についた。そして故郷である秋田県土崎の小学校の同級生金子洋文などと雑誌「種蒔く人」を創刊し、日本にヨーロッパの反戦思想を紹介した。このときから、パリで「コマキ」と呼ばれていたことから、姓と名を逆にした小牧近江のペンネームを用いることになる。

藤田はサロンでの成功をきっかけにパリ画壇へデビューをはたすが、彼を一躍有名にした白地に面相筆による線描を生かした画風は、そもそもこの小冊子からはじまったのである。

1.3. 最初の詩画集

小牧近江（以下、筆名を用いる）の最初の著書である詩画集《Quelques poèmes》は滅多に目にすることができない稀覯本なので、掲載されている12篇のフランス語の原詩と翻訳を紹介する。詩篇を飾る藤田嗣治の挿画については著作権があり、転載することができない。冒頭の数字は詩と線画が載っているページを示す。

- 1) à mon triste cœur / des soirs / qui s'en sont allés / loin.../ loin...

私の悲しい心に / 夜々が / 過ぎ去っていった / 遠く.../ 遠く...

(藤田の線画、手の甲に顎をのせた物憂げな女の横顔)

- 2) pour vous Madame / je n'ai pas de voix / ma tête repose / lourde/ sur vos seins /

Voici mes larmes...

夫人よ あなたのために / 私は 声もなく / 頭を / ずっしりと / あなたの胸にあずける / ほら 私の涙が...

(牡丹の花)

- 3) en baisant / mes yeux mouillés / vous avez bu / tout mon sang / vous oublierez /
est-ce possible ?

涙で濡れた私の脛に / くちづけしながら / 貴女は私の血をみな / 飲みほした / 貴女がそれを忘れてしまうなんて / そんなことはあり得ようか?

(赤子を膝に抱き、指でつまんだサクランボであやす母)

- 4) ce petit sculpteur / s'amuse à pétrir / la tête d'argile / laissez faire l'enfant /
la dame clôt ses yeux / ce n'est pas / une tête morte / elle sourit

この小さな彫刻家は / 粘土細工の頭を / 作って楽しんでいる / 子どもの好きにさせて置きなさい / 夫人は眼を閉じて / その顔は死んではないと / 微笑む

(左手の蠟燭にマッチで火をつける右手)

- 5) il pleut / il pleut / je voulais lire / à haute voix / il pleut / il pleut / j'aime mieux / sentir /
l'odeur du livre
雨が降る降る / 雨が降る / 大きな声で / 読み上げたい / 雨が降る降る / 雨が降
る / 書物の匂いを / もっと感じたい
(羽をやすめる四羽の頭の黒い鳥)
- 6) c'est vous / mademoiselle? / vous bercez ma tête / un peu / c'était la fraîcheur du matin /
discrète / elle glissait / dans la chambre
貴女ですか / お嬢さん? / 軽く / 私の頭を揺すってくれたのは / それは朝のひそ
かな冷気が / 部屋に / 忍びこんできたのだ
(首をさげる馬)
- 7) elle / a fermé / le piano / le thé refroidit / dans le salon / personne / et la fleur tombe /
en silence
彼女は / ピアノを / 閉じた / 誰もいない / サロンでは / 紅茶が冷め / 音もなく
/ 花が散る
(蝶を追う裸の子)
- 8) le piano / entraîne / mon cœur / ne me faites pas / pleurer ainsi / dans cette chambre /
sans lumière
ピアノが / 私の心を / かきたてる / 私をこんなに / 泣かさなだけでくれ / 光のな
い / この部屋で
(和傘を右手でかかげつつ綱渡りをする女)
- 9) et / j'ai laissé / couler / les larmes / dans le soir / noir / personne ne me voyait / dans le soir /
noir
そして / 私は / 涙を / 流しつづけた / 夜の / 闇のなかで / 誰も私を見ていなか
った / 夜の / 闇のなかで
(雪の上のつがいの鴨)
- 10) elle l'aime / j'ai été aimé / une fois / aussi / je me souviens / alors / mon chagrin est infini
彼女は / 彼を愛している / そして / 一度は / 私も愛されていたのを / 思い出す
/ だから / 私の悲しみは果てしない
(組んだ両手に顎をのせ、じっと前を見つめる女の顔)
- 11) elle m'a fait la grâce / de sourire / j'ai baissé / les yeux / le ciel était couvert /
mon cœur aussi / comme toujours / le drapeau flottait / sur le toit / du ministère
彼女はやさしく / 私に微笑んでくれた / 私は / 俯いた / 空は雲におおわれ / 私
の心も同じだった / いつものように / 役所の / 屋上では / 旗がなびいていた
(母牛と乳を飲もうとしている子牛)

- 12) jusqu'à la rivière / l'allée descend / voici / tout en fleurs / les pêcheurs / le vent glisse /
la voile / toute blanche / est / la voile
川まで / 小道はくだっている / 満開の / 桃の / 花 / 風はそよぎ / 真っ白な /
帆 / それは / ヨットの帆
(地面の果物に頭を押しつけている羊)

奥付は以下の通りである。

Achévé / de composer / et d'imprimer / pour la première fois / le quinzième jour de Novembre
mcmxix / sur les presses de / FRANÇOIS BERNOUARD / imprimeur-librairie / 71, Rue des
Saints-Pères, 71 / (Fleurus: 18-13) / A PARIS.

これによれば初版の版組と印刷は1919年11月15日に終り、パリ6区と7区の境にあるサン＝ペール通り71番地にあったフランソワ・ベルヌアールの店から刊行された。奥付には番号がうたれ、210部限定でその内5部は和紙に印刷された。

2. 詩集《une date…》

2.1. ヴェトナム行

1919年（大正8年）12月、10年振りに25歳で帰国した小牧近江は、大戦中に影響をうけた作家アンリ・バルビュスが提唱する「クラルテ（光）運動」や、第3インターナショナルの思想を日本に広めるために活動する決心を抱いて故郷の秋田県土崎に行き、小学校の同級生だった金子洋文や今野賢三と語って、雑誌『種蒔く人』を1921年（大正10年）2月25日に創刊した。

雑誌は労働者や農民の立場から「反戦平和」を強く訴える記事を載せていたため、直ちに発禁処分をうけ、『種蒔く人』はわずか3号で休刊に追い込まれた。その後編集所を東京に移し、同人も増やして「東京版」を刊行するが、1923年（大正12年）9月の関東大震災の際に、亀戸の労働者9人が官憲の手で虐殺されたのに抗議して『種蒔き雑記』を出したのを最後に廃刊に追い込まれた。しかし『種蒔く人』精神は『文芸戦線』などに引き継がれ、昭和に到るプロレタリア運動に大きな影響をあたえた。

ただその分、小牧近江に対する当局の監視の目は厳しかった。そのため翻訳業、国民新聞記者、トルコ大使館勤務などさまざまな職業を転々としたが、新たな職場には必ず官憲が訪ねてきた。そんな苦境の中で小牧の唯一の頼りはパリ講和会議以来の外務省との関係だった。小牧が台湾拓殖株式会社の社員としてヴェトナムに渡ることができたのも、こうしたコネのおかげだった。

台湾殖産会社は本社を植民地台湾の台北に置く半官半民の国策機関であった。小牧は入社早々同社の子会社である印度支那産業会社に派遣された。このころフランス語ができる若い知識人の多くが軍国色を強める国を離れ、職を求めて仏領インドシナ（現在のヴェトナム、ラオス、カンボジア）へ渡った。小牧がヴェトナムに落ち着いたのは1939年8月で、

事務所はハノイ駅に近いジャロン大通り（Boulevard Gialông）28番地にあり、社宅が用意されていた。印度支那産業会社は鉄鉱石やクローム鉱石などの鉱産物、米、綿花、南京袋などをつくるジュート（綱麻）を現地の農民に栽培させて、それを日本に輸出する役割を担っていた。

2008年12月に、ヴェトナムでの小牧近江の足跡を調査するためにハノイを訪れた際に確認したのだが、ジャロン大通りは現在のTran Hung Dao通りで、かつて印度支那産業会社の社屋だった建物はいま病院になっている。社宅のあった場所は不明だが、小牧がまもなく家族と住んだカルノー大通り（Boulevard Carnot）78番地の家は庭のある瀟洒な2階建てで、カルノー大通りはPhan Dinh Phungと呼び名は変わっているものの、建物はそのままだった。道の両側に街路樹が植わり、自動車やオートバイが行きかう大通りだった。

2.2. 日本軍の仏印進駐

統計によれば、1939年当時のフランス領インドシナの人口は2,145万人。そのうちヨーロッパ人は4,160人となっている。ちなみに総督府が置かれたハノイを含むトンキン（当時のヴェトナムの呼び名）の人口は809万6,000人で、内ヨーロッパ人は4万1,600人であった。

ヴェトナムでの小牧の状況が大きく変化したのは、1940年6月22日にフランスがドイツに敗れて屈辱的な休戦協定を結んだときである。その3日後、日本は仏領インドシナにある蒋介石の国民党軍支援のための物資輸送網を根絶すると称して、陸軍、海軍、外務省出身の30名を派遣した。さらに9月になると、中国側国境にいた南支那派遣軍第五師団が国境をこえて進攻、26日には本隊の仏印支那派遣軍がハイフォン港に上陸した。ただ日本軍の進駐後もインドシナの統治権はあくまでフランス側にあり、仏日の共同警備の形をとった上で、フランス側から最大限の対日協力を引き出そうとした。

日本軍は北部仏印進駐に次いで、翌1941年7月には南部へも進駐した。ヴェトナムでは、日本軍のこうした動きに抵抗する勢力が姿をみせつつあった。ホー・チ・ミンを中心にしたヴェトナム共産党である。

ホー・チ・ミンは同年6月6日、「国を愛するすべての世代、すべての職業、知識人、農民、労働者、事業家、兵士」へ呼びかけるとして、当面の政治情勢を次のように要約した²⁾。

フランスはドイツに敗北し、フランス植民地主義者は日本に降伏し、日本がヴェトナム収奪の政策をつづけるのを全面的に支持している。いまや蜂起の旗をかかげるべき瞬間の直前にある、救国が共同目標とならなくてはならない。そしてすべてのヴェトナム人はこれに貢献すべきである。金のあるものは金を、身体の強いものはその身体を、才あるものはその腕前を役立てるべきだ。

2.3. もう一つのフランス語詩集《une date...（あの日...）》

小牧近江は1944年には台湾殖産株式会社を辞職して、ハノイに設けられた日本文化会館の事務局長に就任した。日本文化会館は大東亜省の管轄下にある機関で、軍の進駐と平行して、なるべく穏便に治安を維持し、同時に日本文化を広めることを目的にしていた。そのために日本語学校を運営し、同時に情報収集や宣撫工作の役も担った。

サイゴンの大使館府を辞めた文学者の小松清もハノイに移り、小牧のもとで私設顧問のようなかたちで仕事をするようになった。日本文化会館は51 Boulevard Henri Rivièreに建つ大きな石造りの建物に入っていた。ここは現在のPhon Ngo Quyen通りで、建物は教育省になっている。

小牧や小松の仕事は、多くのヴェトナム人と交わり、得られた情報を本国に送ることであった。しかし二人は任務を越えて、フランスからの独立を願う若いヴェトナム人たちと心情的な絆を深めていった。

小牧近江は、こうした交遊をフランス語の詩にして書きとめていた。彼はやがてこれらの詩を集めて、〈une date...〉と題し、井田鱒司がやっていた「ハノイ日南印刷 (l'imprimerie NITINAN)」で印刷してもらう。印刷が終わるのは敗戦直前の1945年7月2日のことである。

小牧近江の回想録『ある現代史』には、「水煙草」と題した章があり、そこには次のように記されている³⁾。

いろいろな事件があったときに、私は、その日その日のことを、はじめは日記に書きとっていましたが、どうも、いざとなって、日記につけていることがどうかと思って、フランス語で、簡単なメモをとっておくことにしました。

詩でも散文でもない、そういう書き集めが13篇ほど〔収録されているのは12編〕できましたので、私を守ってくれた友人、井田鱒司さんのハノイ日南印刷から出版してもらいました。敗戦の直前に刊行された“あの日”と題するリーフレットがそれで、たどたどしい仏文です。

そこに、どういうことを書いているかといいますと、ひと口にいて、戦争中、勇ましいことを書きつらねている人が多かったようですが、私には、そういうことは書けなかった。たとえば、こんな遣瀨ないことを書いたものです。

“水煙草”

私は夜の静寂に
水煙草を吸うのが好きである
よく、むっくりとベッドからとびおり
豆ランプに灯をともし
大きな真鍮の盆にゴタゴタ並べられているあのひとつだ
ジューッと油がもえ
さむざむと明りをはなつ
水煙草の白い煙りが
むくむくと立ちこめる
とぼけた道化役者があらわれてくる
まるで幻覚のように
私そっくりじゃないか
あわれなイメージ

私は思わず吹き出したくなる
いいんだよ
いいんだよ
私は夜の静寂に
水煙草を吸うのが好きである

これは“LA PIPE À EAU”と題された詩を小牧自身が訳したもので、「道化役者云々」のくぐりでは、原詩では次のようになっている。

“Tout à l’heure
dans les bouffons blanches apparaîtra
comme une hallucination,
un bouffon bien drôle.
triste image de mon espèce,”

3行目の hallucination はここではアヘンや薬物などの吸引で生じる幻覚をさしている。

ハノイで印刷された《une date...》は文字通りの稀覯本だが、小牧家に所蔵されていた一冊が、遺族の桐山香苗氏によって「あきた文学資料館」に寄託され、2008年（平成20年）9月から開催された「小牧近江資料展Ⅰ」で公開された。その折に資料館の厚意で写真に撮ることを許された。

リーフレットは裏表の表紙が縦23cm、横14.8cmで、その間に縦21.7cm、横13.8cmの、詩を印刷した紙を綴じこんだ形になっている。

収録された散文詩は、〈J’AI PERDU MES FRÈRES（わが兄弟を失う）〉、〈LA CITADELLE（要塞）〉、〈CHEVAUX BLESSÉS（傷ついた馬たち）〉、〈PIRATES（海賊たち）〉、〈ÉTUDIANTS SOLDATS（学徒兵たち）〉、〈LES ÉTUDIANTS INTERNES（寄宿生たち）〉、〈MÈRE ET ENFANT（母と子）〉、〈LE GRILLON（こおろぎ）〉、〈REPONSE À UN PLAIGNANT（告訴人への答え）〉、〈CHANSON DU REVOLVER（リヴォルヴァーの唄）〉、〈LA PIPE À EAU（水煙草）〉、〈TROIS MARTYRS（三人の殉教者）〉の12篇である。この貴重な作品を読み解きながら、小牧近江の心情とヴェトナムの若者との交遊をたどってみることにする。なお翻訳は筆者のものである。

2.4. 詩集の内容

傷ついた馬たち（CHEVAUX BLESSÉS）

お前たちは苦しんだにちがいない
機関銃のはぜる音や
砲弾の炸裂する下で
傷ついた馬たち、
背中の痛々しい肉には、
苦勞の痕が刻まれている。

お前、鎖につながれた哀れな馬よ、
 お前は不安な夜をすごしたのだ。
 お前は運命の瞬間までは
 のほほんと生きてきた
 でも、一夜のうちにあなたの涙は干上がった
 私はあなたの運命に思いをはせる
 哀れなわが盲目の馬よ。
 お前は苦しんだにちがいない、
 傷ついた馬たちよ。
 いまは安んじているがいい、
 お前たちは戦友のように
 絆で結ばれた新たな主人がいる
 あそこではもう、一人の兵士が
 あなたの泥だらけの足を洗っている、
 別の兵士は梳いた鬘を野の花で飾っている。
 光り輝く空のもと、
 人と馬は一瞬すべてを忘れる
 まるで何事もなかったように、
 過ぎ去った夜の数々の不幸を。

戦場で働き傷ついた軍馬に注ぐ小牧の眼は優しく、馬たちが感じたであろう恐怖までを慮る。そしてその想いは馬の世話をする日本軍の兵士の上にもおよんでいる。

小牧は日本軍のインドシナ進駐をどう受けとめていたか。それは、「お前たちは戦友のように絆で結ばれた新たな主人がいる」以下の言葉の解釈にかかわるが、日本の政策を強く批判をしているようには受けとれない。彼は現実を肯定しているようにみえる。もう一篇「学徒兵たち」を読んでみよう。

学徒兵たち (ÉTUDIANTS SOLDATS)

これは内側から閉じられた
 あるカフェでのこと。
 たまたま私は常連客たちの
 真ん中に座った。
 私だけがよそ者だった。
 私は引きつった彼らの顔を、
 血走った目を見やった。
 それはショックがあまりにも大きく
 明日のことも定かでないためだった。

離れたテーブルに
老人が一人、
一夜で髪は真っ白くなり
彼は黙って、コップを見つめていたが、
それさえ見てはいなかった。
私は彼が行方不明になった学生の
父親なのを知っていた。
他の大勢の学生とおなじく
若さゆえの情熱が
この悲劇の夜、彼を行方知れずにしたのだ。
私はまた彼は引退した官吏で
年老いた彼のたった一つの希望が
息子である学生だったことを知っていた。
私はたった一人の息子、学徒兵からの燃えるような手紙を
読んでばかりだから、
この単調な世界にあって
私はもう自分が孤独だとは感じなかった。
いまは私たち父親たちから
遠く離れ、遠方にいる
今日の青春の熱い魂を
よりよく理解できると思った。

この学徒兵とは故国の独立のために身を挺して戦っているヴェトナムの若者たちである。小牧の周囲にはそうした若者たちが多く集まっていた。そんな学生の幾人かが、「悲劇の夜」に行方不明になり、あるいは命を落とした。この悲劇の夜とは日本軍が1945年3月9日に突如起こした軍事行動である。《une date…》の最後にはIN MEMORIAM（追悼）として、この事件で亡くなったTHIÊN GIAMから小牧に宛てたフランス語の「燃えるような」手紙の全文が載せられている。

2.5. 敗戦

1945年2月4日にはヤルタ会談が開かれ、ドイツや日本の敗戦は時間の問題と考えられた。そのためインドシナのフランス人たちが希望を持ったのは当然である。日本軍の進駐後、これに順応していたフランス総督府と軍は次第に抵抗の機運をみせるようになった。アメリカ軍の上陸に呼応して立ち上がるといった話がまことしやかにささやかれた。

こうした状況のなかで、3月9日の夜日本軍が先手をうって、フランス軍の武装解除のためのクーデターを断行した。日本軍はフランスの要人を拘束し、一方で拘束されていたヴェトナム人の独立運動家などを釈放した。

親フランス派と目されていた小牧近江や小松清にはクーデター決行の情報は知らされな

かった。だが何かが起きそうだという雰囲気は十分に感じられた。二人には日本軍のクーデターはヴェトナムの独立の前触れに思えた。

インドシナでは日本軍とヴェト・ミン（ヴェトナム独立同盟）が対峙した状態で、1945年8月15日をむかえることになった。翌16日には、アメリカによってひそかに武器を援助されていたヴェト・ミン軍が総蜂起し、19日には部隊がハノイに進軍して、行政機関や工場、主要な道路を占拠し、市立劇場前の広場で大集会を開いた。

ホー・チ・ミンは9月2日ハノイに到着すると、5日にはヴェトナム民主共和国樹立を宣言した。小牧近江は『ある現代史』で、ハノイの様子を次のように述べている⁴⁾。

8月17日、朝起きて巷をみると、家々にぜんぶ赤旗がなびいていました。たった一夜で、このおとなしい民族が、赤旗の天下を樹立している——私は呆然としていました。

少し経って4、5人の越南の青年が、赤旗をおし立てた自動車に乗ってやってきました。「おやじさん、元気か。」みると、顔を知っている若い連中ばかりです。椅子をすすめるのですが、座りません。彼らは立ったまま、礼儀正しく、次のようにいいました。「まことに、あなたの国にとってはお気の毒であった。ながい間、われわれのためにいろいろと力を添えてくれたことに感謝の意を表わしたい。われわれは、たとえ日本が負けても、日本に対する同情は失わない。いや、われわれは日本国民にたいしてむしろ一層の愛情すら感じているものである。今後もしっしょにやりましょう。

小牧や小松たちの努力が実をむすび、ヴェトナムでは1946年2月に左右の連立内閣ができ、その全権とフランス側が正式に交渉することになった。そして3月6日、フランスとヴェトナムとの和平暫定協定が、アメリカ、イギリス、中国の代表が列席するなかで締結された。不可避とみられた軍事衝突は回避された。小牧たちの達成感は大きかった。

1946年4月中旬、インドシナからの日本人の引き揚げが実現した。引き揚げ船はハイフォンから出港することになった。出港前日、小牧近江や小松清のために港の酒場にヴェトナムの友人が集まって惜別の宴を催してくれた。帰国する者たちは持てるだけの荷物をつめたリュック・サックを担いでタラップを上った。やがて船が埠頭を離れると、栈橋のヴェトナム人は別れを惜しんでハンケチを振ってくれた。現地にヴェトナム人の妻子を残していくために涙を流すものもあった。この地で生まれた子どもたちは甲板に集まって、ヴェトナム語の歌をうたった。

小牧の荷物には「ハノイ日南印刷」から出版した詩集《une date...》が大切にしまわれていた。

註

- ¹⁾ 小牧近江はパリ講和会議の日本代表団の新聞係の一員として働いた。新聞係は課長の松岡洋右課長以下7人で、内外記者団との接触や他国代表団との会合の設定を担った。かつてNHKで《ドキュメント昭和〜ベルサイユの日章旗〜》というテレビ番組を制作したとき、小牧が残した「写真アルバム」を見つけた。これは代表団の日常を記録した貴重な資料で、その一部は同名の著作（角川書店、1986年）のなかで紹介している。いまアルバムの現物は「鎌倉文学館」に所蔵されている。

- 2) Lady Borton : HO CHI MINH, A Journey. (THE GIAO PUBLISHERS, 2007)、76 頁。
- 3) 小牧近江『ある現代史』(法政大学出版局、1965 年)、170～172 頁。
- 4) 同、175 頁。